『蜻蛉日記』論
――「鳴滝籠り」を中心とした物詣記事について――

目崎夏海

はじめに

『蜻蛉日記』の作者、道綱母は、摂関家の御曹司である兼家と結婚し、翌年兼家の次男の道綱を生んだ。しかしそれ以外の子には恵まれず、兼家の以前からの妻・時姫や、次々と新しく現れてくる妻たちのなかで、夫の足が遠ざかることによる悲哀や嘆きなどを繰り返すうちに、ついに兼家が通わなくなり夫婦関係が絶える。この一連の結婚生活の様子を記した日記が『蜻蛉日記』である。

作品中で夫との関係に悩まされる道綱母は、何度も物詣や祓などを行っている。他の日記文学にも物詣記事が見られるものもあるが、寺社仏閣への物詣を通ずることで作者の感情や書きぶりを見ることが出来ると考える。中でも『蜻蛉日記』中巻の大部分を占める「鳴滝籠り」記事からは前述のとおり様々なことを読み取れる。ここでは物語文学とはまた違った魅力を持つ日記文学『蜻蛉日記』の中でもより作者に近づけるだろう物詣記事に注目したい。

本稿では『蜻蛉日記』全巻における物詣記事を「鳴滝籠り」の記事を中心に分析し、日記文学『蜻蛉日記』における物詣記事の存在意義、作者としての道綱母、そして作品に対してどのような効果をもたらしているのかを考察していく。

一　物詣とは

『蜻蛉日記』には上・中・下巻にわたって計十数回もの物詣が記されている。そもそも物詣とはどのようなものを表す言葉なのか。言葉の意味を確認すると、一般的に「寺社仏閣へ参拝すること」である。『蜻蛉日記』の物詣記事を見ると、日帰りで終わる場合と何日か日数をかけて泊りがけで行われる場合の二パターンあることが読み取れる。また寺社への参詣は、男女・貴賤・老若問わず幅広い人々によって行われている。しかしあくまでも一般的なもので、現代の私たちがイメージする物詣と作品執筆当時である平安時代の物詣では認識が異なるのではないか。物詣について沢田正子氏は次のように述べている。

今日、寺社への参詣としてまず挙げられるのが墓参であり、次いで初詣などであろう。前者は寺院が対象であるが、一般にその寺の仏、本尊を礼拝するより眠る個人たちの霊を慰めることが主眠である。一方後者は神社、仏閣双方に共通で、神仏に

年の始めにあたり一年の幸いや平安を祈念するものである。平安期などには寺への墓参りの風習はなく、物詣といえばもっぱら後者の形に近いが、その実態は現代以上に多様である。

当時の物詣は参詣、参籠という宗教的、信仰上の目的の他に行楽、心身の解放の好機という意もあったのである。ことに貴族の女性たちは邸内という狭い生活空間に埋没して日常を送ることを余儀なくされていたため、外なる世界、野外への憧れも一入であった[1]。

このように物詣には、私たちが初詣や寺社仏閣を参拝するときのように祈念するだけではなく、行楽や心身の解放という意図も含まれていると考えられる。確かに、当時の女性たちはあまり外出する機会もなく、自由に一人で出かけることもできない。そのように考えると参詣・参籠といった宗教的・信仰的名目のほかにも行楽的要素や気分転換的要素は含まれていたと推測できる。増田繁夫氏は当時の貴族女性たちの物詣について『日本の作家9　右大将道綱の母』で次のように述べている。

ひたすら神殿の奥深く籠って、毎日を薄暗い世界に暮らしていた貴族女性たちにとって、物詣は単に空間的に広い外部の世界に出る機会であっただけではなく、眼前の未知の世界にふれることで、改めて日ごろの狭い世界に身を置いているわが身を、客観的にふり返って見る機会であるという点でも重要なものであった。現代においても旅のもつ第一の意味は、日ごろ身を置く日常的な世界から一時的に外に出て、改めて遠くから自己の日常的な世界を見直す視点を得るところにあると思われるが、貴族女性たちにとってはその意味がわれわれよりはるかに大きなものであった[2]。

当時の貴族女性にとって、ただ単に外の世界に出る機会であっただけではなく未知の世界にふれることで、改めてわが身を客観的にふり返って見る機会でもあった。それは、現代の私たちが旅に出るのと同じような感覚であったとするとよりイメージしやすいだろう。当時の貴族女性たちも、物詣に私たちと同じような思いを乗せていたのだと考えられる。

また、物詣の意義について岡崎知子氏は次のように述べている。

かりにも仏法に心を寄せ、みずからの菩提を願う者は、必ずみずから寺に足を運んで参詣し、読経を聞き、仏をおがみ、法会に結縁すべきであつて、そうすることによつて莫大なる功徳利益を受けることができるのであるということを示している。そして実際にその寺なり法会なりに出かけて行つて、その寺の仏をおがみ、その法会に結縁することが大切なのであって、その参詣すること自体が善根であり、功徳を積むことになるのである。このように物詣は神仏の功徳利益を求めて実際にその寺社に歩みを運ぶということが一般化したものと思われる。実際に出向いて行つて、半日なりあるいは一夜なり三夜なりをその寺の「あるじのほとけ」の前に「詣でつかうまつる」ことに物詣の意義があるのである[3]。

この見解には渋谷孝氏も「作品形成の契機　蜻蛉日記：物詣」[4]の中で賛同している。仏法に心を寄せて菩提を願うならば、遠い地から思いをはせるのではなく、自ら寺社に赴き仏の前で詣でることに意味があるという意見に私も賛成する。実際に出向くことで寺社が持つ力を取り込むことが出来るだろうし、出向いて行いを施すことで功徳の習得につながると考える。そして自ら寺社に出向くのならば、その道中は今まで体験したことのないものと出会う機会になり、一種の旅となり得るのである。

では、『蜻蛉日記』における物詣はどうだろうか。前述した物詣の条件を踏まえて全巻を確認してみると、計十八回もの物詣記事が記されている（資料一）。作者である道綱母は生涯宮仕えなどをせず、家の外に出ることもしなかった。そのため物詣という行為やそれに伴い手に入れることのできる新しい経験は、道綱母にとって印象強い出来事であり、忘れがたいものであったと想像できる。道綱母にとって印象強い出来事であったのなら、自らの半生を振り返って書かれた『蜻蛉日記』に何度も取り上げているのは自然なことだといえるだろう。特に鳴滝籠りの記事は天禄二年の記述量の約半分を占め、作品中の転換点であるとされるほど作品全体に大きく影響している部分といえる。書き手としての作者の書きぶりは巻を進めるごとに洗練されていき、その成長も記述を追うと分かってくるだろう。そしてそこに対読者意識も織り込まれることでより一層日記文学的なものになっていく。作者として成長していく道綱母の姿は物詣記事の執筆によって明らかになっているのではないか。

（資料一　『蜻蛉日記』の物詣一覧）

『蜻蛉日記』中に見られる道綱母の物詣記事を大小かかわらず抽出した。項目として、行き先（物詣の対象）、年月、場所、収載されている巻・段、動機（きっかけ）、和歌の有無、自然描写の有無、同行者、日数、手段、備考（目的や内容など）を立てた。

〈参考〉

・岡崎知子「平安朝女性の物詣」（『国語と国文学』四三巻二号、一九六六年一月）

・西木忠一『蜻蛉日記の研究』（和泉書院、一九九〇年）

・小町谷照彦「『蜻蛉日記』」（『国文学　解釈と鑑賞』五七号一二号、一九九二年一二月）

※なお、岡崎知子氏の「平安朝女性の物詣」では、①②⑤⑦⑧⑪⑭⑮⑰の記事は行き先（対象）が明示されていないため、物詣研究では数に含めていない。

※本文に記述がみられない、また読み取ることができない項目については「?」を付す。

※「手段」項目については、当時の移動手段は車が常だと考える。ここでは本文への記述の有無によって判断し、記述がみられない場合は「×」を付す。

行き先	年	月・季節	場所	巻・段	動機	和歌	自然	同行者	日数	手段	備考
①山寺	応和二年（九六二）	七月	京	上・三五	加持祈祷避暑	無	無	兼家	十日前後	×	忌明けの気晴らしも兼
②山寺	康保元年（九六四）	秋	京	上・四〇～四四	母の加持祈祷	作者四首 兄一首	無	母 道綱	十日以上の滞在と推測	×	母の死と法事
③稲荷 ③賀茂	康保三年（九六六）	九月 九月晦日	京	上・五五・五六	祈願（遊山）	作者七首（稲三・賀四）	無	?	?	×	和歌を奉納
④初瀬	安和元年（九六八）	九月	奈良	上・六五	子宝成就の宿願	作者一首 兼家一首	有	供の者	十日前後 一夜参籠	車 舟	三日参籠予定が一夜に
⑤唐崎	天禄元年（九七〇）	六月	滋賀	中・八五	気晴らし お祓い	作者和歌一首 連歌一首	有	似た境遇の人・道綱	一日	車	同行者は他に侍女・供人
⑥石山	天禄元年（九七〇）	七月	滋賀	中・九二	身の上の嘆き	無	有	供人	十日前後 三日参籠	徒歩 車 舟	二泊三日のように書かれる
⑦父邸長精進	天禄二年（九七一）	四月一日	京	中・一〇五	兼家噂の女と契り	無	無	道綱	一か月以上	車	四五条のほどで長精進
⑧鳴滝	天禄二年	六月～	京	中・百十～一二六	しばらく身を引こう	十一首内 作者四首	有	供人	二十一日	車	「西山に例のものする寺（般若寺）」か。
⑨初瀬 ⑨春日	天禄二年	七月	奈良	中・一三二	父の参詣に同行	作者一首	有	倫寧 供人	六日程度 一夜参籠	車 舟	ついでに春日に立寄る
⑩賀茂	天禄三年（九七二）	閏二月十日	京	下・一五〇	誘われて	無	無	誘ってくれた人	一日	×	北野、船岡のあたりをめぐる。
⑪人の詣づめる所	天禄三年	三月十日	?	下・一五二	知り合いに同行	無	無	知り合い	半日 昼頃帰宅	車	ある人の物詣に同行

⑫清水	天禄三年	三月十八日	京	下・一五三	知り合いに同行	無	無	詣でる人	一日	車	火事と聞き慌てて帰宅
⑬賀茂	天禄三年	四月十日頃	京	下・一五五	幣帛奉納誘われて	無	無	ある人	?	×	伊尹と詣で会う。
⑭山寺	天禄三年	十月十日過ぎ頃	京	下・一六六	誘われて見物	無	無	家の者	?	×	鳴滝般若寺と思われる
⑮人目に付かぬ所	天延二年（九七四）	一月冬	京	下・一八〇	誘われて	作者一首	無	誘う人	?	×	ある人と物詣
⑯賀茂	天延二年	一月	京	下・一八一	?	無	無	?	?	×	⑮の三日後
⑰奥山	天延二年	二月	?	下・一八三	お忍びで行こう	作者一首	無	養女	二日程度	×	鞍馬か
⑱稲荷	天延二年	五月	京	下・一九五	障ることなきに	作者三首	無	同じ所なる人	一日	×	衣と和歌を奉納

二『蜻蛉日記』中巻部「鳴滝籠り」の実態

では、作品の中で最も多く記事量を占める「鳴滝籠り」の記事を検討したい。道綱母が鳴滝籠りを決行したのは、天禄二年（九七一）年六月四日である。決行の理由は、兼家が自分の所を素通りすることが度重なり、思い出すだけでもつらくしばらく身を引こう、というのが考えられる。参籠先は上巻でも登場した「例のものする寺」で、鳴滝にある般若寺ということから鳴滝籠りと総称する。兼家は行くと言いながらも訪ねてこない日々が続いたので、兼家の物忌が終らないうちに出発しようと出立の日時を決めたのだ。出発の支度をしている時に、兼家が服用している薬を見つける。そこに歌と手紙をつけ、道綱に言付けを頼み持たせた。その手紙を見て慌てて書いたと思われる手紙には「思いとどまるのが良い。相談しなければならないこともあるから今すぐそちらへ行く。」と書いてあり、歌が書き添えられていた。道綱母は手紙を見て兼家を待たずに出発した。

山寺へ向かう道中は、供人が三人ばかり付き添っていることが本文から分かる。以前、兼家と共にした物詣を思い出し涙にくれながら山寺に向かうのである。山寺に到着すると身を清めてから初夜の勤行をする。ここから本格的にまるで出家するかのような勤行生活が始まるのだ。途中月の障りになって寺から離れた建物に降りたが、五日ほどで再び御堂に上がる。御堂で勤行するほかには、訪ねてきた人と話したり、手紙（和歌）のやりとりをしたりして過ごす。訪ねて来てくれるような人たちは皆来ては帰ってしまい、下山するに

もしきれず悩んでいるうちにタイミングを逃してしまった。鳴滝に参籠する前の長精進のとき、出家して気持が救われるなら尼になるのも…と考えていたこともあり、道綱母の心にはこのまま出家してしまおうという気持ちが少なからずあったのではないかと推測する。そんなふうに心を決めかねて日々を過ごしている時、威勢よく兼家がやって来る。道綱母の気が動転している間に、道綱に下山の支度の指示を出し部屋を片付けさせてしまう。そして道綱母は茫然とした気持ちのまま、兼家・妹と同じ車に乗って一緒に下山することになった。こうして「鳴滝籠り」という山寺参籠は二十一日（三週間）で幕を閉じることとなる。

以上のように、実態を整理してみると物詣記事描写におけるポイントが見えてくる。他の物詣よりも滞在時間が長いこともあるが、勤行によって解放された心で見ているものを描写しているのが特徴的である。また著者としての道綱母も日記が進むごとに成長しているように思われる。そこにはどのような特徴がみられるのだろうか。自然描写に注目して見ていく。

【自然描写】

鳴滝籠りの記事の中では、特に前半部分に自然描写が多く用いられている。またその対象も多岐にわたっており、日々を過ごしていて目に入って来る花や木立、雲や風物などが描かれている。該当する箇所をいくつか例に挙げる。

Ⅰ　まづ僧坊におりゐて見出だしたれば、前に籬結ひ渡して、また何とも知らぬ草ども繁き中に、牡丹草どもいと情けなげにて、花散り果てて、立てるを見るにも、散りかはるとよ、といふことを、返しおぼえつつ、いと悲し。　（中巻・一一一段）

Ⅱ　山めぐりて懐のやうなるに、木立いとしげくおもしろけれど、闇のほどなれば、ただいま暗がりてぞある。初夜行なふとて、法師ばらそそけば、戸おし開けて念誦するほどに、時は山寺わざの、貝四つ吹くほどになりになり。　（中巻・一一二段）

Ⅲ　木陰いとあはれなり。山陰の暗がりたる所を見れば、蛍は驚くまで照らすめり。里にて、昔もの思ひうすかりし時、二声と聞くとはなしに、と腹立たしかりしほととぎすも、うちとけて鳴く。水鶏はそこと思ふまでたたく。いといみじげさまざるもの思ひのすみかなり。　（中巻・一一五段）

Ⅳ　かくてあるは、いと心やすかりけるを、ただ涙もろなるこそ、いと苦しかりけれ。夕暮の入相の声、茅蜩の音、めぐりの小寺のちひさき鐘ども、われもわれもとうちたたき鳴らし、前なる岡に神の社もあれば、法師ばら読経奉りなどする声を聞くにぞ、いとせむかたなくものはおぼゆる。　（中巻・一一五段）

Ⅰでは参籠先の鳴滝般若寺に到着して僧坊から庭を眺めていた時に最初に目に留まったのが牡丹草である。花びらが散りはてた状態の牡丹草を見て、『古今和歌集』の歌を思い浮かべたのだ。その花に自己を投影し、自らの身の上の哀れさを感じては悲しい気持になったのだと考えられる。Ⅱでは闇夜の中で見た木立や時刻を知らせる

法螺貝が描かれている。京では味わうことのない山寺特有の情景が道綱母の心に印象深く残ったゆえの描写だと考える。Ⅲは六月の盛りになったころ、風情のあるものとして「木陰」や「蛍」、「ほととぎす」、「くひな」が描かれている。鳴滝にいるからこそ味わえる風物を見聞きしたことで、より一層わびしさがつのり物思うことが多くなっていく状態に道綱母を誘うのである。Ⅳは一緒に長精進を続けてきた道綱がだんだん弱って来ている姿を見て涙がこぼれがちになっている時に聞こえてきた音である。つらい気持でいる時に耳に入って来る「夕暮の入相の声」や「茅蜩の音」、「小寺のちひさき鐘」を打ち鳴らす音や「法師ばら読経」をあげたりする声を聞くことで、なんとも言えない悲しい気持になるのだ。

以上の例を見て見ると、京では味わうことのない景物の描写だけでなく、日常の中で耳にした音や声の描写までされていることが分かる。また、自然の景物に自己の感情を投影するような描写も見られる。上巻から中巻にかけて様々な出来事を経て執筆してきたことで、作家として成長していたことは作品の描写を見ていくと実感できる。作家として成長したことで自然描写を活用し、自己の感情を巧みに表現しているのだ。

また、前半部分に自然描写が多いのは先にも述べたが、後半部分は自然描写がほとんどみられず、人の交流や贈答歌が中心となっている。後半部分について伊藤博氏が次のように述べている。

> 後半は紀行文というよりは日常的な生活記事といってよく、人々の動き・贈答歌などが記事の中心となっている。その点から見ると、鳴滝籠りの後半は紀行文としての性格が薄くなり、日記の体裁を持っているといえようか。道綱母は日常生活から脱出して鳴滝に籠ったのであろうが、そこでの生活が長引くにつれて旅そのものが日常化してしまったのであろう。道綱母と自然との感応は前半に見られ、自然描写という点に関してみるなら、後半は充足感に乏しいといえようか。(5)

以上のことから、「鳴滝籠り」記事の自然描写は主に前半部に現れており、自然の把握を通して自己の感情をも表現する効果がある。

三　物詣記事から見る作者

次に『蜻蛉日記』全体の考察を踏まえて、作者について考察していきたい。まず作者の筆の特徴でもある『蜻蛉日記』における自然描写の観点から作者に注目する。物詣記事に自然描写が見られるのは確認したが、全巻を通して散文にも自然描写が用いられている。物詣記事に見られる自然描写とそれ以外の散文での自然描写とでは筆に違いがみられるのか。

まず、物詣記事以外の散文の自然描写について考察する。ここでは『蜻蛉日記』下巻・一四四段、一四五段を例に挙げる。

> 日ごろ、いと風はやしとて、南面の格子は上げぬを、今日、かうて見出だして、とばかりあれば、雨よいほどにのどやかに降りて、庭うち荒れたるさまにて、草は所々青みわたりにけり。あはれと見えたり。昼つかた、かへしうち吹きて、晴るる顔の空はしたれど、ここちあやしうなやましうて、暮れはつるまでながめ暮らしつ。

三日になりぬる夜、降りける雪、三四寸ばかりたまりて、今も降る。簾を巻き上げてながむれば、「あな寒」と言ふ声、ここかしこに聞こゆ。風さへはやし。世の中いとあはれなり。

（下巻・一四四段、一四五段）

『蜻蛉日記』としては下巻に入り、年が明けた。兼家との関係は相変わらずの状態で、道綱母としてはいつ訪ねてくるのか、どうせ訪ねてはこないでしょうといった気持ちになってきている。そんな中、権大納言に昇進した兼家が道綱母の元を訪ねてくる。兼家の昇進が夫婦間に及ぼす影響を考えて憂鬱になってしまっている道綱母だが、来てくれたことはうれしいと感じたであろう。一夜明けて雨が降っていながらもあっという間に帰ってしまう様子には複雑な感情を抱いたと考えられる。その後に書かれているのが先述した引用部分である。この部分について篠塚純子氏は次のように述べている。

「こゝちあやしうなやましうて」の原因は何も書かれてありませんけれど、私には、夫と久しぶりに夜を過ごした道綱母の余情がここににじみ出ているように思えます。夫への甘えの気持ち、それはとりもなおさず、夫が帰って行った後、一人残された寂しさに通じるものでもありましょう。さらに、ほのかに兆すわが老いへの悲しさ――男盛りの夫のすばらしさを見た直後だけに、女の盛りも過ぎようとしているわが身がひとしお哀れに思われたとしても不思議ではありません。そのような心の状態が女の身に体たちまち響いてくることを、私自身もたびたび体験してきました。

しかし、大切なことは、このような自分の思いを直接に筆にすることなく、春愁の空や庭の風情にそれとなく暗示する形で書き表していることではないでしょうか。先の「客観視」[6]もじつは道綱母自身へも向けられているのだと思います。

同じ部分について守屋省吾氏は、

こういった自然観照は対兼家記述における情念的表現の減少とは無関係ではなかろう。少なくとも以上見てきたごとき下巻の世界は、素材・表現態度ともども平坦でありつつも、その内側には透徹した自己凝視と内省性が底流し、自照文学としての一典型となり得ていると言える。「ものはかなき我が身の上」といった主題は必ずしも経験的に帰納されたものではなく、思惟的、観念的に理会されたものであったために、十五年間の結婚生活を文学的操作によって潤色しなければならなかった上巻、苦悩・煩悶のるつぼにあえがなければならなかったが故に、作品の世界はきわめて劇的であり、自ずから情念の赤裡々な表現に横溢することになった中巻と比較するならば下巻の自照文学的進展度は大きいといわなければならない。

そこで問題になるのはそういった下巻の世界が、道綱母の明確な志向性によって形造られるに至ったのか、あるいは兼家との結婚生活約十八年間の経験と上・中巻執筆という文学的営みとが両々相俟って自らそういった文学的方法を獲得するに至ったかである。[7]

と述べている。この意見に私も同様な考えを持つ。道綱母にとって、兼家が訪ねて来てくれることは女としてとてもうれしいことだと考えられる。久しぶりに共に過ごした兼家の様子を道綱母はしっかりと心に残していたのだろうか、兼家の姿が鮮明に、そしてその情景が具体的かつ立体的に書き上げられているのである。このように書けるほどじっくり兼家のことを見て心に残していたのならば、それに続く書きぶりに道綱母の兼家に対する複雑な心境が反映し、間接的に表れることになるだろう。兼家が帰った後に降る雨、それが雪となり加えて風も激しく吹いてくる。そこには兼家が来たことによって再び愛欲地獄の中へと入ることになり心を乱された道綱母の心象、「世の中いとあはれなり」（下巻・一四五段）に込められた風情を感じると同時に襲ってくる悲哀を見ることができるのではないかと考える。

また、この場所で用いられている「世の中いとあはれなり」（下巻・一四五段）は、雪景色や侍女たちの声などの様子やそれを眺めている自分を書き記したうえでの道綱母の思いが込められているのである。「世の中」という語は目に触れ心に触れるものすべてや道綱母を取り巻く環境、自然界という漠然とした広い意味が含まれていて、しみじみとした自然の景観や世間の風情、また寂寞たる作者の生そのものをも、「世の中いとあはれなり」がすべて総括して示していると考えられる。

次に中巻部・鳴滝参詣の場面の自然描写について考察する。ここには自然の景物に自己を投影する描写が見られるが、なかでも「雨」の描写が用いられている箇所がいくつかある。一つ例を挙げると「例の時しもあれ、雨いたく降り、雷いといたく鳴るを、胸塞がりて嘆く。」（中巻・一二一段）と記述されている。鳴滝参詣中の毎回の日記に天候についての描写があるわけではない。しかし天候が左右されやすい山の天気をあえて日記に書くことで、道綱母が抱く複雑な心情が無意識化で情景描写に投影され、より効果的に作用していると考えられる。だが、純粋に天候について書いている場合もあるとも考えられるため、解釈が難しい部分である。この一連の鳴滝参詣の場面では引歌表現が多く取り入れられている。ただ単に古歌を引いてきて文中に織り交ぜたのではなく、引歌が煩わしさを持たず、ぎこちなさも作らず自然な流れで文章が進んでいる。ここから歌人としての顔も持つ道綱母の技量が見受けられる。

以上のことから『蜻蛉日記』で用いられている自然描写には、物詣記事・散文に問わず、作中人物の心情をより効果的に表す働きをしていると考える。様々な表現技巧を用いながら書かれている作品であるが、どれも引っかかることなく自然な流れで使用されているのだ。効果的に使用される自然描写や色彩にこだわって用いられる描写、和歌の伝統をも超えるような独自の世界観から道綱母の持つ美意識が感じられる。歌人としての顔を持つ道綱母だからこその世界観や深い描写につながるのではないだろうか。

次に歌人としても有名な道綱母だが、散文で『蜻蛉日記』を書きあげた。作者の高い知識と文才があってこそ引歌が生き感情を的確に表現する一端を担っている。ここでは、上・中・下巻に書かれている和歌に注目して、作者・道綱母を考察していく。抽出する和歌は道綱母が詠んだものとする（物詣に付す番号は資料一を参照する）。まず上巻では、②山寺詣四首、③稲荷詣三首・賀茂詣四首、④初瀬詣一首の計十二首。中巻では、⑤唐崎祓一首、⑧鳴滝籠り四

首、⑨初瀬詣一首の計六首。下巻では⑮人目に付かない所一首、⑰奥山詣一首、⑱稲荷詣三首の計五首である。

以上のとおり、まず注目したいのは上巻部に一番多く和歌が記されていることである。その理由として散文で表現するよりも和歌で表現することが一般的だった道綱母が本作品を執筆した当時、家集ではない形で書くにしても和歌的に書くしか方法がなかったと想像できる。増田繁夫氏は『和歌と物語』の中で次のように述べている。

だが「日記」はもともと外界の物事を記録するためのものであり、人間の心の表出表現を目的としたものではない。当時の意志や感情などの内面世界の表現はもっぱら歌によって行われていたのである。この日記が和歌的な文体で始まったのは当然であろう。外的世界の記述ではなしに、内面の複雑な感情やまとまった主張などを、前例の乏しい散文で書くのがいかに難しいことであったかは、この日記の序文のたどたどしさからもうかがわれる。

上巻の多くの歌は、単に実際の生活の中で詠まれたものであるから日記に書き記した、というだけではなく、歌を記すことでその物事についての感情の側面を表現するという作品の内容にも積極的な機能をはたしているのである。(8)

当時は和歌に感情をのせて表現することが当たり前で、夫婦の言い合いも和歌で言い争うような描写からも、道綱母にとって一番自己の感情を表すのに和歌が有効であったと推測できる。それを踏まえると、日記に書かれる歌はもちろんのこと歌以外の部分も和歌的な性格を持ってしまうのも当然だと考えられる。しかし道綱母はそこでとどまらずに、歌を含まない記事や和歌的でない記事の執筆も見られる。増田繁夫氏は町の小路の女への激しい憎悪の心を記した記事を例示して次のように述べている。

筆者がこの町の小路の女への激しい感情を、和歌的な表現にまで転移させることができず、日常語的な態度そのままに書いたことが、新しい散文的な領域を掘り当てることとなった、ということである。(9)

兼家との夫婦関係や兼家を取り巻く他の女性の存在によって生まれた嫉妬や憎しみの感情が、作者としての道綱母を成長させる一要因となったと言える。

また、上巻と比較して中巻の物詣記事には和歌があまり書かれていない。これについても増田繁夫氏が以下のように述べている。

『蜻蛉日記』の筆者が物詣でに出た時に歌を詠まなかったのは、当時の歌が対象を普遍的な姿に様式化することにあったためと考えられる。日ごろ室内の閉じられた狭い空間に身をおいている筆者にとっては、物詣での道すがら目にするこの世界の個別性具体性はあまりにも豊かで、和歌の様式へ抽象化することが手に余ったのである。(10)

歌があまり書かれていない反面、風景や風物を見た時の感動が鮮明に描かれている。そこには物詣によって日ごろ狭い世界にいる作者

が得た開放感による。また、道綱母は歌人としての和歌の心得・知識を強く持っていたと考える。その知識量によって散文という枠にとらわれない和歌的表現での文章や、和歌と散文がぶつかり合うことなく共存し得る作品を生み出すことにつながったのではないだろうか。「引歌表現」はその代表ともいえる。「引歌表現」は和歌でしか感情を表現できなかった場面でも、歌人として、歌語の一つ一つを自然に散文にあてはめるようにし、そして少ない文字数に感情をのせることによって詳細な描写を可能にしたと推測する。

四『蜻蛉日記』の物詣記事の在り方

最後に、『蜻蛉日記』内における物詣記事の存在意義やその効果について考察する。まず動機に注目すると、上巻は自ら思い立っての物詣であり、中巻は道綱母の意志の強さが垣間見えるが上巻から受け継いだ自発的な動機で物詣を決行している。そして中巻に記される「鳴滝籠り」が『蜻蛉日記』全体を通じての頂点と言われる。対して下巻はほとんど周りの人の誘いを受け同行するという形なのだ。自ら思い立って決行するという上巻・中巻での物詣とは異なることが分かる。それは下巻の描写がより日記的な文章になり記事も簡潔に書かれている所からも想像できる。物詣を決行する動機の根底には、道綱母が兼家や他の妻たちに対して抱く妬み、嫉み、悲しみ、苦しみといった感情がいつもひそんでいた。特に上巻から中巻「鳴滝籠り」まで（①～⑧）の物詣記事には兼家との関係が悪化したことによるものや他の妻の存在への劣等感、焦りによるものだったことからも、道綱母の大きく揺れ動く感情を見ることができる。自分の感情に収拾がつかなくなった時、心の解放を求めて物詣をするための動機となるのだ。一方中巻「再度の初瀬詣」から下巻（⑨～⑱）までの物詣記事は、作品の大きな転換点である「鳴滝籠り」を経験した後の物詣になっている。「鳴滝籠り」で兼家との気持ちに整理がついたからなのか、物詣の動機に自主的な感情が入ることはない。兼家を思ってつらく苦しい気持ちを抱くことはあっても、それは動機となり得るまでの大きさではないのだ。道綱母自身も物詣に対する目的意識がはっきりしていなかったのではないかと推測できる。

次に物詣の行き先（対象）に注目する。『蜻蛉日記』全体で計十八回の物詣が記されているが、その対象についてはっきり明示されている場合と明らかにされていない場合がある。明記されているということは、道綱母にとって意味を持つ重要な物詣であると考えられる。明らかにされていないものの例として上巻の①②山寺詣③稲荷・賀茂詣が挙げられる。内容を読んで対象となる場所は推測できるが、例に挙げた三つはどれも京の地での物詣である。①山寺詣は「例もものする山寺」（上巻・三五段）と表記されていることから、今までにも何度か訪ねたことのある場所だと分かる。それは①山寺だけに限らないと推測できる。道綱母にとって自邸近辺ともいえる地での物詣は、日常生活の一部であり何度も行った物詣の一つに過ぎないと考えられる。あまり重点を置くような物詣でなかったと仮定するならば、なぜ記されているのか。それは、道綱母の心を動かす出来事との関わりがあったからだと考える。兼家とともに参詣したり、母の死や和歌の奉納など日常生活の中でいつもとは違う何かが起こった時、物詣記事となり記されたのだと考える。

さらに物詣の中にある和歌に注目すると、上巻部に一番多く和歌

が記されている。その理由として散文で表現するよりも和歌で表現することが一般的だった道綱母が本作品を執筆した当時、家集ではない形で書くにしても和歌的に書くしか方法がなかったと推測する。歌人でもある道綱母にとって一番自分の感情を表現できるのは和歌であったと考えられる。すべての記事に和歌が用いられているわけではないが、上・中・下巻のどこかの記事には和歌が使われている。自分の感情を的確に表現する道具としての役割もあったと考える。

以上のことから、物詣は一種の旅的要素を含むため、作品に行楽的な彩をそえる役割を果たしている。普段自由に行動ができず狭い世界で暮らす平安貴族女性にとって物詣（旅）は、すべてが新鮮で解放感あふれるものであった。物詣の宗教的面で苦悩からの解脱をはかり、その道中の旅的一面で気持ちを晴らすのである。そして自分を解放していく中でどうにもならない事実や感情を文字や文章におこしていく。心のうちでは解決できない・表現できないことであっても書くことによって自分の気持を出し、整理する。そうすることで自己を投影した感情を表現することにつながると考える。あまり自由がない生活を送る作者にとって、物詣では思い悩み苦しむ自分を解放させる場でもあったのである。

五　おわりに

以上の考察から、物詣は思い悩み続けるつらい気持や願いを成就させるため、また行楽的要素も含むことから旅で気持ちを晴らすという面で作品を彩っている。道綱母は思い悩みつらくてどうしようもない状態に陥った時、物詣を行っていた。それは自己解決できない苦しみを物詣の対象である神仏にゆだね、嘆き苦しみからの解脱に努めるのである。しかし作品内では神仏に記録の焦点を当てるのではなく、寺社へ参詣する道中の風物や景物といった自然描写によってその物詣記事の存在感が高まる。

また歌人としての知識と文才を備えていることで、散文にも和歌にもその知識が反映され一つ一つの描写が深く詳細なものとなっているとした。道綱母の自然描写には、作中人物の心情をより効果的に表す働きをしていると考える。歌人としての力量をうまく活用し、散文に和歌的描写を自然な流れで使用しているのである。効果的に使用される自然描写や色彩にこだわって用いられる描写、そしてここぞという時に和歌を用いて文章を彩る書き方には、和歌の伝統をも超えるような独自の世界観から道綱母の持つ美意識が感じられると考える。歌人としての顔を持つ道綱母だからこその世界観や深い描写に繋がるのだ。

このように、道綱母は日記を書くことで、自分の感情を整理し、客観化し得たのではないだろうか。現代に比べたら行動が制限されている平安朝の女性たちが、自然に触れることができ、さらに神聖な場所に自らを置くことができる物詣の意義を検討した。作者及び当時の特に女性にとって物詣が生きるために欠くべからざる行動、行事であったと結論づけた。また記事の検討によって、作者の特徴的な執筆方法についても論じることができた。そこには作者の自然と人事を融合させる特徴的な表現―『源氏物語』に繋がるもの―の開拓があったと考えられる。

そして、物詣とはあくまでも当時の人々にとって日常生活の一部である。日常的に何事もなくやり過ごしている出来事に非日常の外的要因が働きかけ出来事と結びつくことで、その物詣は人々の印象

に残るものとなり、ひとつの記事となり得るのである。物詣記事は旅という行楽的要素と自分ではどうしようもならない心身の解放といった宗教的要素が融合して、日記内では一つの転換点として作品に働きかけているのである。

注

(1) 沢田正子「女人と物詣」(『国文学』七一巻三号、二〇〇六年三月)
(2) 増田繁夫『日本の作家9　蜻蛉日記作者　右大将道綱母』(新典社、一九八三年)
(3) 白井たつ子・新田孝子『蜻蛉日記の風姿』(風間書房、一九九六年)
(4) 渋谷孝「作品形成の契機　蜻蛉日記：物詣」(『国文学　解釈と教材の研究』二六巻一号、一九八一年一月)
(5) 伊藤博『蜻蛉日記研究序説』(笠間書院、一九七六年)
(6) 篠塚純子『蜻蛉日記の心と表現』(勉誠社、一九九五年)
(7) 守屋省吾『蜻蛉日記形成論』(笠間書院、一九七五年)
(8) 増田繁夫「日記文学と和歌―蜻蛉日記の形成―」(『和歌文学論集』編集委員会編『和歌と物語』所収、風間書房、一九九三年)
(9) (8)と同じ
(10) (8)と同じ

※本論における『蜻蛉日記』本文引用・段落番号・現代語訳は、川村裕子訳注『蜻蛉日記』Ⅰ・Ⅱ(角川ソフィア文庫、二〇〇三年)による。また、引用文の必要箇所にある傍線・囲み線は適宜付した。

受贈雑誌(一)

愛知教育大学大学院国語研究
愛知県立大学説林
愛知淑徳大学国語国文
愛知大學國文學
愛文
青山語文
宇大国語論究
歌子
愛媛国文研究
愛媛国文と教育
大妻国文
大妻女子大学紀要
大妻女子大学草稿・テキスト研究所研究所年報
岡大国文論稿
大阪大谷国文
お茶の水女子大学國文
香川大学国文研究

愛知教育大学大学院国語教育専攻
愛知県立大学国文学会
愛知淑徳大学国文学会
愛知大學國文學會
愛媛大学法文学部国語国文学会
青山学院大学日本文学会
宇都宮大学国語教育学会
実践女子短期大学部日本語コミュニケーション学科研究室
愛媛国語国文学会
愛媛県高等学校教育研究会国語部会
愛媛大学教育学部国語国文学会
大妻女子大学国文学会
大妻女子大学
大妻女子大学草稿・テキスト研究所
岡大学言語国語国文学会
大阪大谷大学日本語日本文学会
お茶の水女子大学国語国文学会
香川大学国文学会